

純心・三ツ山・恵の丘

——どこにももない大学——

●文化コミュニケーション学科教授
入試委員長 勝俣 好充

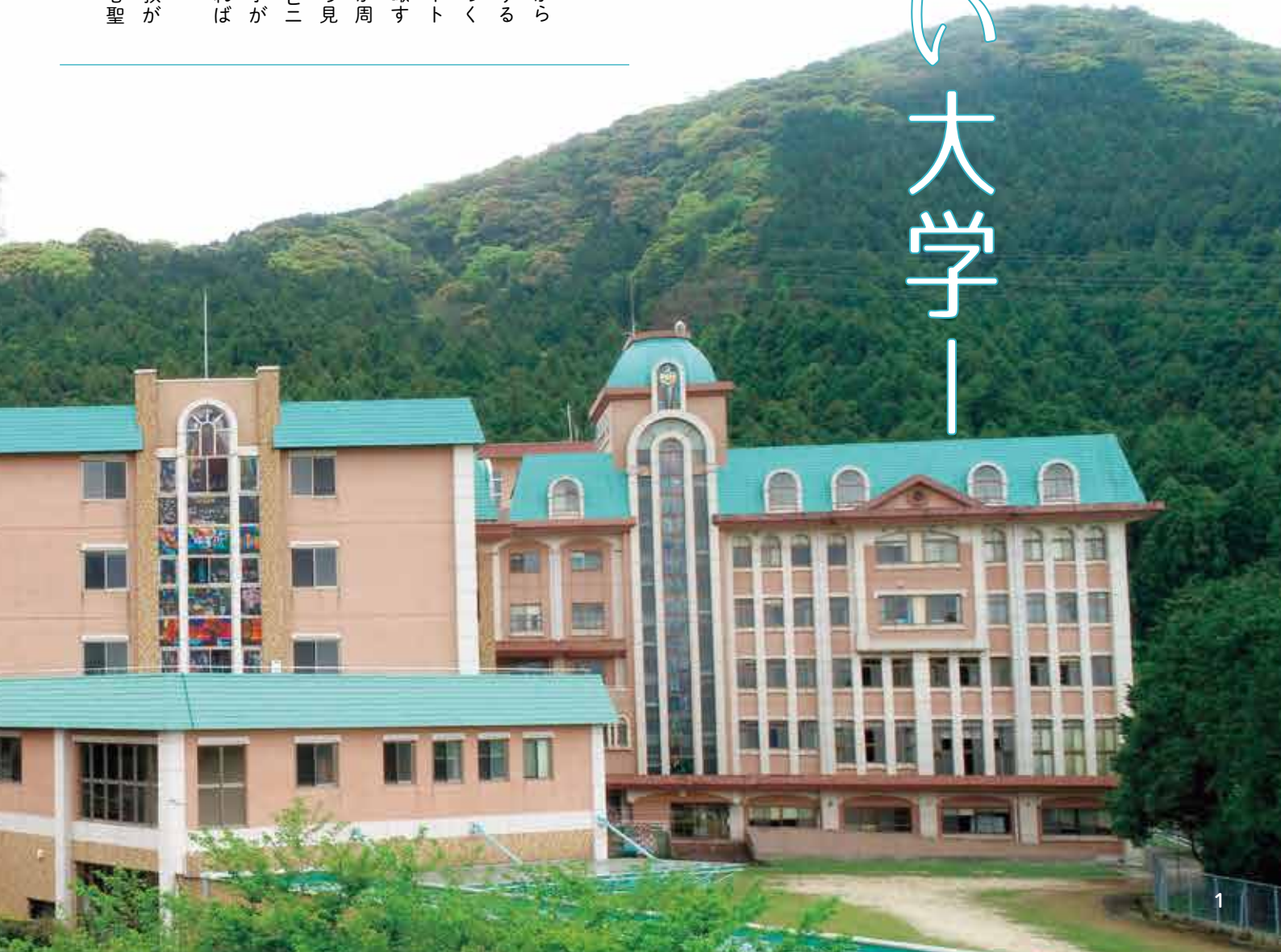
キャンパス再考のとき

二〇二〇年初頭から始まった
Covid-19の地球規模の感染拡大は、
私たちの生活に様々な変化をもたら
しました。各大学においても、対面授
業に替わりオンライン遠隔授業が導
入されるようになったこともその一つ
です。これによって問われるのがキャ
ンパスの意義です。遠隔で授業が成立
するのであれば、必ずしもキャンパス
に通う必要はないのでは、という疑問
が浮かぶからです。ここでは長崎純心
大学が三ツ山にある理由と歴史を探
ることによって、この疑問に答えてみ
たいと思います。

一九七五年

三ツ山という名は長崎市内どこから
も三つの山頂が見えることに由来する
ようです。長崎純心大学からしばらく
登ると、その最高峰、標高五〇六メー
ルの帆場岳山頂があり、地図を俯瞰す
れば大村湾、有明海、橘湾、長崎港が周
囲に広がっています。キャンパスから見
えるのは大村湾です。周辺にはコンビニ
もありませんので、この場所に大学が
あるのはあらためて不思議でなければ
なりません。

歴史をたどると、早坂久之助司教が
シスター江角ヤスとともに長崎純心聖



母会を創立し、学校設立の認可を申請したのは一九三四年十二月八日(無原罪の聖母マリアの祝日)です。校舎は文教町にありましたが、一九四五年八月九日の原爆により甚大な被害を受け、二四名の生徒を喪います。しかしシスター江角は学園の存続を決断すると、さらに修道会の開墾地で戦時中の疎開先であった三ツ山に原爆ホームを開設、隣接する土地をあらたに購入し、五年後の一九七五年に短期大学のキャンパスを文教町から移転しています。二〇二五年には、三ツ山キャンパスは誕生から五〇周年を迎えます。

山のある大学

遠隔授業によって教室の必要は原理的に失われますが、大学は特定の場所にあるわけですからキャンパスの意義を考えることは、教室の中ではなく教室の外に目を向けることを意味します。都市にある大学は、カリキュラム(教室内)とは別に都市(教室外)にあることが特色です。長崎純心大学の場合には山にあることです。これを価値として「山のある大学」と表現します。二〇二二年にはバス停からの坂道を「マダレナ坂」、池のある正面の中庭を「カタリナ・コート」(水庭)、右手にある中庭を「サンタ・マリアコート」(光庭)、左手奥

の中庭を「ザビエル・コート」(緑庭)と名付けました。建物に囲まれた中庭を英語でcourtと呼びます。このように教室の外に目を向けると、三つの中庭の周囲に教室が配置され、山に包まれているのが長崎純心大学です。

一九七五年の「山のある大学」への決断は、近代の本質が都市化であることを考えれば反時代的でした。以下、一般に流通している時代用語を離れ、目差しを遠くに置き直すことで、そこにあるものがそうであること以外の何かに繋がっていることを言葉にしてみたいと思います。

未完の新大陸

アメリカ文学を参照すると「山のある大学」に光が当たります。旧大陸から新大陸へ離脱したアメリカの基底に、街から山へと同型の文明から自然へと強い志向があるからです。例えば街を離れウォルデン湖畔に建てた小さな家で二年余りの自給自足の生活を送ったヘンリー・ソロー。その実験生活から生まれた『森の生活』(一八五四)は、根源的文明批判による覚醒の書です。マーク・トウエイン『ハックルベリー・フィンの冒険』(一八八五)には、少年ハックが逃亡奴隷のジムとミシシッピ河を下る筏に仰向けになって、満天の星屑を見上げ



二人で語りあつた夜が描かれています。教室の外に目を向けることによって、長崎純心大学の夜と山は未だ足を踏み入れたことのない未踏の領域として現れます。文明から自然へ、教室から教室外へ、頭脳から身体へ、一九七五年の決断はこのように部分の否定から部分を包むものへと向つていたのではないでしょう。コロナ禍は身体と場所が持つ価値をあらためて考えさせるものでした。

塔のある風景

では三ツ山とはいったい何か。こう問うのはそれが単なる山ではなく、被爆からの再生を支えた場所という意味で現在、「恵の丘」と呼ばれ、長崎純心大学、純心聖母会本部、恵の丘原爆ホーム等を擁し、本学の図書館棟壁画、ステンドグラス等を制作主導した本田利光先生による「十字架の道行」の先には創立者早坂久之助、初代学園長江角ヤスの遺骨を安置した聖堂があるからです。ヨハネ・パウロ二世、マザー・テレサこの地を訪れています。

富士山が自然遺産ではなく信仰の対象として世界文化遺産であるように、三ツ山は文明の終局を経験した一人のシスターの「意志」によって直立する「塔」であると考えられます。鎮魂と永

久平和を願う標高五〇六メートルの祈念塔ですが、大きくて見えないかもしれません。三ツ山に設けられた医療救護所で救命活動にあつたのは永井隆博士でした。博士もまたうたによる鎮魂の塔を遺しています。

燔祭はんさいのほのほの中にうたいつづ
白ゆり乙女燃えにけるかも

最後の原爆投下を経験した街は、福島原発事故やウクライナ危機を通り過ぎたものとするはできません。長崎という場所を塔のある街として世界史の中に置いて考えるとき、長崎純心大学のカタリナ・コート（水庭）の意味もまた変わってきます。爆心地を流れる浦上川の水は三ツ山が水源ですから、聖マリアの腕の中にある「生命の水」に変容し、三ツ山という場所の意味を世界的に再定義し、聖母塔とも呼ぶべきものが立ち現れます。

創立記念日および卒業証書授与式は浦上天主堂で執り行われますが、なぜでしょうか。浦上四番崩れを前史として持つこの天主堂もまた原爆の廃墟の上に建つ塔だからです。禁教令が解かれたのは一八七三（明治六）年、天主堂はそれから六年後の一八七九（明治二）年の創建になります。創立者早坂久之助は日本人初の司教として教区長を十年

間務め、浦上天主堂は現在長崎大司教区の司教座聖堂です。降り注ぐパイプオルガンは塔のある風景の祝祭の音にほかなりません。

今年禁教令廃止二五〇周年を迎えます。長崎に塔のない時代があつたことをあらためて心に留め、長崎純心大学が塔のある風景の中心にあることを明確に意識しなければなりません。

巡礼礼賛

教室で学ぶために特定の場所に通学する必要は希薄になりました。しかし三ツ山が「恵の丘」であるとするれば、別の意味を持ちます。すなわち聖地巡礼です。宗教儀礼としての巡礼には聖なる場所と日常から隔絶した距離を歩くことが含まれますが、十四世紀イギリスを描いたジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』に見られるように、万物の甦りを告げる春のみずみずしさと、愉快な気分もまた巡礼には溢れています。効率主義からは理解し難い三ツ



山キャンパスは、それゆえ近代が忘れ去った巡礼の愉悅を秘めています。バスや自動車がいまは大半ですが、徒歩で通った学生がすでにいるということですから。たとえバスや車にせよ、卒業生にはむしろ四年間にわたる一つの巡礼として身体に記憶されているのではないのでしょうか。巡礼ということ言えば、私たちは聖地で土産物を買うだけでなく水と食べ物と休息を提供したいものです。

三ツ山キャンパスが学園歌にある「真理のさと」、「生命の水」、「英知の窓」、この三つの言葉の実体化であったとすると、一九七五年の意味はより深く理解されるかもしれません。「生命の水」の変容はすでに見ました。「英知の窓」は同窓という言葉が示すように窓が学校の隠喩ですから、英知の学舎という意味です。ところが三ツ山では教室の窓から外に目をやると「真理のさと」であるという驚くべき意味に変わります。言い換えれば、教室の中に解答があつても答えはない。ソローはこの結論から森の生活を始めました。カリキュラムのスリム化は教室内の時間を減らし、身体を「真理のさと」に置く時間へ転換すること、すなわち山キャンパスの教室化を意味することになります。

長崎純心大学は「知恵のみちを歩み人と世界に奉仕する」という理念を

掲げています。これを「巡礼」として捉えれば、三ツ山は登らなければならぬ聖なる山なのです。

暗い時代に

イギリスの科学者マイケル・フアラデーが子供たちに行ったクリスマスマズ講義が『ロウソクの科学』（一八六〇）という本にまとめられています。呼吸を止めるに至るコロナウイルスですが、その人間の呼吸がロウソクの燃焼と同じ仕組みであること、すなわち酸素と炭素を燃料として熱を発生させ、二酸化炭素を放出することを数々の実験で明らかにし、最後に言います。みなさんの時代が来たとき、一本のロウソクに例えられるような人間になって下さい、ロウソクのように輝き、周りを照らして下さい、ことを願っています。

時代と場所を異にする二つの精神が一つの証明になることがあります。「鉄をとかした溶鉱炉も最初は一本のマッチ」。同様にロウソクの輝きも点火なしに生まれません。人に点火できるのは点火された人です。点火の神秘が「純心マッチ」に宿っています。点火された人シスター江角がその生涯を終えた場所が三ツ山です。暗い時代にあって点された火は、ハックとジムが見上げた星屑のように地上に輝き、人と世界を照らす

かもしれません。国境を越えどこにも住める旅券を手に行っているのは、人と世界を照らす人です。

ここまで述べてきたことからすれば三ツ山キャンパスの意義は「燔祭のほのほ」の歴史によって見出された「真理のさと」に学ぶことにあります。純心幼稚園から中学、高校と一貫して受け継がれる知恵のみちは「恵の丘」に続き、包むカトリシズムの精神は塔のない時代を耐え二千年余の広がりを持ち、その起源には点火の神秘があります。もちろん現代では「真理のさと」など、冗談でなければ口にできません。しかしチヨースターの巡礼者はそんな風に愉快に冗談を言いあいながらいまも旅の春の途中です。

